

僕はセクサロイド。型番はS-0000025-XY。ご主人様へのご奉仕が最大の喜びです。

なのに何故、全裸でゴミ山に倒れているのでしょうか。

雨粒が硬質な瞳の表面を叩きます。記憶にバグが生じます。空には分厚い雲が渦巻いて、灰色に曇っていました。僕は……セクサロイドです。セクサロイドのはずです。

なのに何故、自分の型番以外思い出せないのでしょうか。

周囲には瓦礫とスクラップが打ち捨てられています。ちぎれたアンドロイドの手足をどけ、極端な緩慢さで上体を起こします。山のあちこちから有害物質を含む煙が上がっていました。どうやらスラム街みたいです。顔にあたるのは酸性雨です。

僕は廃棄処分されたのでしょうか？

仕方ありません、壊れたセクサロイドは捨てられる宿命です。たまに稼働年数限界まで初期化を繰り返し酷使される個体もいますが、記憶にバグが生じます。

ここは人形の墓場のようです。至る所にアンドロイドやセクサロイドの身体の一部が転がり、丸々肥えたドブネズミが走り回っていました。雨粒が瞳に当たって弾けます。

水たまりを蹴散らす音。濁った飛沫。誰かがぬかるみを渡っています。

突然、視界に影がさしました。

背格好から推定13歳程度の少年が、重苦しい曇天を背負ってこちらを覗き込んでいます。

どうして曖昧な言い方をしたのかというと、無骨なガスマスクを被っていて顔の造作がわからないからです。レインコートのフードを目深に下ろしてるので髪の色さえ判然としません。

「お前……か？」

ザザ、ザザ……瞼の裏に走ったノイズの波長が不規則に途切れ、不定形の影が少年とすり替わります。

激しさを増す雨音にかき消され、後半は上手く聞きとれません。多分「お前セクサロイドか？」と聞かれたのです。

「どうしてそうおもうんですか」

「ケツに色々突っ込まれてる。鉄パイプとか」

ああ、どうりで……目覚めてからずつと下半身を苛み続けた、違和感と苦痛の正体が判明しました。僕は肛門に鉄パイプをねじこまれていました。一本ではありません。二本、三本……

「スパナとねじ回しも。工具箱かよ」

「随分と手荒な修理ですね」

「直つてるようには見えねえけど」

「でしようね」

僕は工具でアナルを犯されていました。

少年があきれて言います。

「人間だったら死んでた」

セクサロイドは肛門に異物を挿入された程度では壊れません。しかし目一杯拡張されたアナルが疼いて、圧迫感が苛みます。

「すいません。抜いてくれませんか」

「なんで俺が？ やだよばっちい」

「そういわずに。通りかかったのも何かの縁ということで少年は顔を引き攣らせて拒みます。正常な反応です。」

とはいえ、現在の状態では自力で引き抜くのは難しいです。なんとしても彼に摘出してもらわなければ……この少年を

逃してしまえば、次の人が通りかかる確証はありません。などと解析している間に本人が立ち去りかけていました。させません。咄嗟に縄り付きまます。

「離せよ！」

「お願いします、又いてください。哀れなセクサロイドを助けると思って」

「セクサロイドは嫌いなんだ、くたばりやがれ！」

「助けてくれたらお返しします」

少年がだしぬけに立ち止まります。雨はまだ降り続いています。僕はともかく、人間が長時間浴び続けるのは体に毒です。少年はその場に固まり、思い詰めた様子で考え込んでいました。

「お返して、なんでも？」

「お好きなように」

少年が回れ右して引き返し、僕の身体に足を入れて裏返しました。レインコートの裾に前衛的な泥ハネが散り、その後アナルに挿入された鉄パイプを掴みます。

「ッ、んぐ」

セクサロイドの身体は性感を過敏に調整されています。この体は暴力が与える痛みすら快感に置き換えるのです。少年がパイプを掴む手に握力を込めます。体の奥底を抉る灼熱感が疑似的な前立腺に接続され、ペニスが痙攣します。

「勃たせてんじやねえよ、気持ち悪」

「すいません、あッ、ああッ！」

少年がわざと先端を押し込みます。続いて右に左に、ぐりぐりと意地悪く回します。内壁をこそぎ落とされる激痛に身体が跳ね、ペニスが白濁をまき散らしました。

「セクサロイドってホント何されても感じんだな」

「ごめんな、さッ、ああッ」

泥たまりに白濁が落ちて薄まります。僕はぬかるみを這いずって悶え苦しみます。責め苦はまだ終わりません。少年はむしろ僕を苛むのが目的みたいです。逐一仰け反り喘ぐ僕の反応を面白がり、残酷な好奇心が赴くまま鉄パイプを捻り、かと思えば奥まで突っ込んで一気に引き出し、傷付いたアナルを犯しまくりました。これではまるで疑似的なレイプです。

「じつとしてろよ、抜けねえじゃん」

「すいませっ、ンンうっ！」

汚いブーツで背中を踏み付けられました。僕が暴れないように固定した上で、漸く鉄パイプを抜きます。

「ふあうっ、ンあっあ」

「ケツをかきまぜられて切ない声だすんじやねえよ、ド淫乱」

「もつと、ああっ、もつと！ 奥までガンガン突いて罵っ

てください！」

「俺を変なプレイに巻き込むんじやねえよ!」

まだです、まだまだです。上体を支える肘が滑る都度ぬかるみに突っ伏し、頬に泥が飛び散ります。最初は面白がってた彼も今やドン引き。僕は今全裸なので、ピンピンに勃った乳首とペニスが丸出しです。

スクラップ

「廃棄品と勘違いして、浮浪者やガキどもが面白半分に突っ込んだのかな」

「わか、りません。覚えていません、ッああ！」

少年が俯きがちに独りごち、喘ぎが高まります。二本目、三本目………続いてスパナやねじ回し、ドライバーも摘出されました。体内の異物を全部取り除かれ、再び動けるようになります。

まずは顔の前に手を翳し、小指から順に曲げていきます。少し引つかかる感じはしましたが、いけそうです。

「ありがとうございます」

「じやあ行くぞ」

「はい？」

「お返しがまだだろ」

そういうばそうでした、すっかり忘れていました。僕はボンコツです。

尊大に顎をしゃくられ、震える足で立ち上がります。

ギシリ、錆びた膝関節に自重が乗って軋みます。少年に手を貸してくれる気はないようでした。

異物が取り除かれたとはいえ下半身の損傷は深刻で、回復には少々時間がかかりそうです。

「待つてください」

「でくが命令すんな」

足早に歩きだす背中をびっこを引いて追いかけます。ゴミ山の周囲からは相変わらず煙が上がっていました。彼がしているガスマスクは煙の吸入を防ぐ為でしょうか。使い古しのレインコートは殆ど役に立っていません。裾からは夥しい雪が滴っています。

「あの……」

「なんだよ」

「みんなが見ています」

「素っ裸だからな」

少年は断固たる足取りでゴミ山を抜け、荒廃しきつた路地を歩いていきました。

僕を目で追った浮浪者は一様に好奇の色を浮かべます。場末を徘徊しているセクサロイドが珍しいのでしょうか。もしくは露出狂と誤解しているのかもしれませんが。思いきつてお願いしました。

「せめて性器を隠したいのですが」

「木偶の分際で恥ずかしがんの？」

「現状を客観的に実況^{リポ}すると、あなたは露出狂を引き連れた変質者ですよ。大変目立っています」

少年が道の真ん中で立ち止まり思案します。軒先で雨宿りする浮浪者たちの視線が全身に突き刺さり、さらに続けた。

「僕はセクサロイドなので羞恥係数の調整が可能です。お客様が望むなら羞恥係数を上げて恥じらうそぶりもできますし、逆に下げて大胆なりクエストにもおこたえできます。なので現在進行形で不特定多数から注がれる視線を快感に置き換えることはたやすいですが、あなたも視姦に興奮する特殊性癖をお持ちなのでしょうか」

少年は黙って突っ立っています。気のせいか小刻みに震えているようです。首をかしげて応答を待ち侘びる僕の周囲に、垢じみた浮浪者たちが群がってきます。

「コイツはスラムにや珍しい上玉だな」

「オレンジの髪と宝石みたいな瞳……驚いた、野良セクサロイドかい？ 横流しすりや高く売れるな」
ロストバリーシ

「中古は買い叩かれるんじゃねえか？」

「どれ、商売道具の具合は」

「あつ、やめてくださいあッあッあッ」

異物でもあそばされ弛緩しきつたアナルを次々とほじくら

れます。

セクサロイドは全身が剥き出しの性感帯です。肌に当たって弾ける酸性雨さえも刺激になり、アナルを責め抜く指にすら高ぶっていくのを止められません。

疑似的な前立腺が快感を何十倍にも増幅して人工脳に届け、瞳の裏側に0と1が流れていきます。

「反応も上々だ。俺たちで輪姦すか」

浮浪者が僕の乳首とペニスをいじくり倒し、アナルに指を出し入れます。

「コイツは俺んだ!」

突然腕を引っ張られました。ガスマスクの少年が僕の手首を掴み、全速力で走り出したのです。

「待て!」

背後で野太い怒号が炸裂します。振り向けば浮浪者たちが追いかけてきます。セクサロイドは高く売れる……その言葉が脳裏に響き渡りました。

「僕、パーツ単位で分解されてしまうのでしょうか」

「かもな」

「バラ売りは嫌です」

「死ぬのが怖いのか。いつちよ前に」

ガスマスク越しのくぐもった声で嘲ります。ぐ、と腕に指が食い込みました。憎しみが込められているように思えた

のは気のせいでしょうか。

少年はとてもしばしつくく土地勘にも恵まれていました。絶え間なく降り注ぐ雨粒が波紋を広げる水たまりを軽快に蹴散らし、複雑に入り組んだ路地を右に曲がり左に折れて、あつというまに浮浪者たちを巻いてしまいました。圧倒的な経験値を感じさせる逃げ足の速さでした。

「スピードを落としてください、関節が壊れます」

「ごちやごちやうるせえな、スクラップの寄せ集めの分際で」

漸く失速します。少年は膝に手を付き、苦しげに呼吸を整えています。かと思えば群れたガスマスクを剥ぎ、こちらを振り向きました。

「ほらよ」

無造作に投げてよこされたのは骨のへし折れた雨傘です。

「股間。隠せば?」

「……お借ります」